

# 北海道 室蘭・登別地区における精神保健ソーシャルワークの歴史と展開

著者	橋本 菊次郎, 永井 順子, 福富 律
雑誌名	北翔大学教育文化学部研究紀要
巻	4
ページ	195-206
発行年	2019
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00002755/">http://id.nii.ac.jp/1136/00002755/</a>

北海道 室蘭・登別地区における  
精神保健ソーシャルワークの歴史と展開

History and development of the mental health social work  
in Muroran/ Noboribetsu district of Hokkaido.

橋 本 菊 次 郎  
Kikujiro HASHIMOTO

永 井 順 子  
Junko NAGAI

福 富 律  
Ritsu FUKUTOMI

北翔大学教育文化学部研究紀要  
第4号 2019

# 北海道 室蘭・登別地区における 精神保健ソーシャルワークの歴史と展開

History and development of the mental health social work  
in Muroran/ Noboribetsu district of Hokkaido.

橋 本 菊 次 郎  
Kikujiro HASHIMOTO

永 井 順 子<sup>1</sup>  
Junko NAGAI

福 富 律<sup>2</sup>  
Ritsu FUKUTOMI

## 1. はじめに（研究背景、動機）

1964年の日本精神保健福祉士協会の設立から50年以上が経過し、日本における精神保健ソーシャルワークは一定の歴史を重ねてきた。しかし、その歴史記録については「協会史」が中心であり、日本の精神科医療の歴史研究—精神科医らによる研究が中心（岡田1981, 岡田2002, 広田2004ほか）—においてもソーシャルワークへの言及はほとんど見られない。さらに、地域の独自の精神保健ソーシャルワークの歴史については、個々の実践者による記述はあるが、学術研究は皆無といってよい状況で、各種史料・資料も散逸した状態であることが推察される。

このような研究動向下、精神保健ソーシャルワークの黎明期を築いた先駆者たちの高齢化は進み、歴史的事実の聞き取りや当時の資料収集は猶予のない時期に来ている。筆者らは北海道で精神保健福祉士養成教育に携わるなかでこの点を実感し、養成教育のなかで地域に根ざした精神保健ソーシャルワークの歴史を伝える必要性を感じてきた。また、北海道の精神保健ソーシャルワークには十勝や浦河をはじめとし、全国的に見ても独自性をもつ実践が豊富であり、この地の歴史の解明、体系的・包括的歴史記録の作成には十分な学術的価値があると考えた。

ただし、広域である北海道を一枚岩のものとして分析することは難しい。そこで、第三次医療圏である道南、道央、道北、オホーツク、十勝、釧路・根室の6区域に分け、区域ごとの精神保健ソーシャルワークの歴史を調査、分析、記述する研究を試みることにした。

また、研究対象とする年代について、大西（2015）が精神保健ソーシャルワークの歴史を、①戦前から1960年代まで、②1960年から1980年代、③1990年代以降の三つの時代区分により記述していることをふまえ、北海道の精神保健ソーシャルワークの黎明期である1960～70年代、形成・発展期である1980～90年代に設定することとした。その理由としては、①の時期はソーシャルワークの前史にあたること、③の時期についてはソーシャルワーカーの人数や所属機

1 北星学園大学社会福祉学部

2 東京家政大学人文学部

関の種類も増え、上記6区域で概括することは難しい状況が生まれていることや、本研究では先駆者のソーシャルワーク活動の記録を後代に残すことも大きな目的の一つとしていることがあげられる。

## 2. 本稿の目的

上記研究背景および動機のもと研究を進めたところ、6区域のうち道央には、札幌市、小樽市や江別市など札幌市近郊、東胆振、西胆振と、それぞれ精神科医療を取り巻く事情の異なる地域が含まれており、単一に分析することに難しさのあることが明らかになってきた。そこで本稿では、西胆振にあたる室蘭・登別地区に焦点をあて、同地区の精神保健ソーシャルワークの歴史と特色を整理することを目的とする。

## 3. 研究方法

当該地域の精神科医療および精神保健ソーシャルワークに関連する資料・史料を収集するとともに、1960～90年代に同地域でソーシャルワーク実践を担ったソーシャルワーカー2名(元・三愛病院・田中秀治氏、恵愛病院・佐藤克彦氏)に当該地域の精神保健福祉の歴史と自身による精神保健ソーシャルワーク活動の展開についてインタビュー調査を実施した(2018年5月21日)。実施にあたっては、書面及び口頭にて研究目的、方法、倫理的配慮につき説明を行い、同意書に署名を得た。なお、本研究は、北星学園大学研究倫理審査委員会による承認(17-研倫13号, 18-研倫22号)を得て行った。

## 4. 研究結果

### (1) 室蘭・登別地区の概況

今回の研究対象である室蘭市、登別市は北海道の南西部に位置し、第三次医療圏では道央に属し、第二次医療圏では西胆振地区となる。

室蘭市はアイヌ語の「モ・ルエラニ」から転化したもので“小さな・下り路”という意味で、崎守町仙海寺(さきもりちょうせんかいじ)前の坂が、ゆかりの地とされている。1600年頃、松前藩が、アイヌの人たちと交易をするため、絵鞆場所を開き、運上屋を置いたのが始まりである。1872年、室蘭村崎守町に室蘭海関所が設置されるとともに、北海道開拓計画の第一歩として、函館～森～室蘭～札幌を結ぶ札幌本道の開削が始まり、以降、室蘭～森間の定期航路開設や炭鉱鉄道会社による室蘭～岩見沢間の鉄道敷設、日本郵船による室蘭～函館～青森を結ぶ定期船の就航などにより、港は本州と北海道を結ぶ海陸交通の要衝として発展してきた。1907年には日本製鋼所、室蘭工場の建設が始まり、1909年には、北海道炭鉱汽船輪西製鉄場が設立する等、

現在の鉄鋼の町としての発展につながっている。1922年8月1日に市制が施行され、当時の人口は52,158人、戸数は10,700戸であった。室蘭市の面積は80.65km<sup>2</sup>、人口はピーク時の1970年頃には16万を超えていたが、以降減少し続け、2018年10月末現在84,225人、45,776世帯である。

登別市は、アイヌ語の「ヌプルベツ」で“色の濃い川”という意味で、温泉の白い濁った水が流れる川のことを指している。支笏洞爺国立公園の中核に位置し、登別温泉を抱える観光都市であり、室蘭工業圏の一翼として発展してきた。1869年、太政官布告により仙台藩白石城主の片倉小十郎邦憲が幌別郡の支配を命ぜられ、1906年幌別鉱山の開発が進んだ。金、銀、銅、硫黄の採掘が行なわれ、高い産出量を誇った。1919年幌別村となり、1951年には幌別町、1961年登別町と変更となり、1970年に市制が施行された。面積は212.21km<sup>2</sup>、人口は1985年の58,370人であったが、2018年10月末現在48,464人、世帯数は24,917世帯となっている。

現在の精神科医療の体制は、市立室蘭総合病院120床、三村病院（室蘭市）300床、恵愛病院（登別市）250床（医療型療養病棟等含む）、三愛病院（登別市）534床（医療型療養病棟等含む）となっている。

## (2) 室蘭・登別地区の精神科医療の歴史

室蘭・登別地区の医療の歴史は1872年9月に元室蘭に診療所が開所、翌年に官立病院となったことに始まる。1873年6月には新室蘭に移転し、室蘭病院と改称、1882年公立、1901年町立、1918年区立と変遷し、1922年市立室蘭病院になる（市立室蘭総合病院1972：214）。町立室蘭病院時代の1902年に附属室蘭精神病院（6坪、2床）が設立されたと呉秀三『我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設』にある（呉1912→1977：98）。2018年5月21日の田中秀治氏へのインタビューで、当時、他に「舟見町の青山診療所」が存在していたことをうかがったが、詳細は不明であった。

また、この地の精神科医療の黎明期における特筆すべき事柄として、1930年に北海道大学精神病学教室の内村祐之教授が登別のカルルス温泉を視察したことがあげられる。同温泉が「脳病患者、精神病患者に対して効能多き事は兼々より伝聞致し居り」ということでの視察であった（千葉2007：46-47）。カルルス温泉は1886年に発見され、1899年に日野久橋氏と市田重太郎氏によって開湯した。チェコスロバキアのカルルス・バードの泉質に似ていることからその名がついたという。明治後半から湯治客が増え、昭和初期には4万人を超える客が訪れている（登別町史編纂委員会1967：855-857）。また、1930年には室蘭病院の板澤庄五郎院長が『温泉療養の栞』を発行し、そのなかでカルルス温泉の効用として「病症の時期を選ばず常に入浴差支なきもの」の筆頭に「脳及び神経諸病 殊に機能的神経病、神経衰弱症及びヒステリー」をあげている（板澤1930：42）。

一方、室蘭・登別地区の戦後の精神科医療は、室蘭と登別の間である鷲別の地で1955年に恵愛病院（50床）が開設されたことに始まる。開設者の遠藤廣雄氏の著書『私の歩いた道』によれば、同病院の開設は1955年3月、会社経営をしていた遠藤氏の事務所（室蘭市御崎町）を赤平市の平岸病院の木田敏雄事務長が訪れたことを端緒とする。木田氏は石炭販売業を廃業して平岸病院の事務長に就任した人物で、同氏の姉が遠藤の会社の事務員をしていた縁であっ

た。木田氏より、今後精神科病院の必要性がますます高まること、室蘭市のような大都市に精神科病院がないことは、精神障害者を抱える家族にとっては大変不便であり、患者にとっては不幸なことであるとの話を聞き、遠藤氏は精神科病院建設をライフワークと決めた（遠藤1984：13-15）。遠藤氏にとって精神科病院の創業は起業であったことが著書からうかがわれる。その後、院長の招聘に奔走した後に、市立札幌病院附属静療院に勤務していた千葉寿良医師を迎え、同年12月16日恵愛病院を開業、遠藤氏は事務長として医業経営に携わった（遠藤1984：18-22, 71）。同病院の建設時には「町の発展の障害になる」「治安上有害」「町民の日常生活に危険」などの「市民のレジスタンス」にあったが、遠藤氏は精神障害者への誤解を解くことに努め、程なく理解を得られたという（遠藤1984：27-29）。『恵愛病院50周年記念誌』には「環境よく設備よし 鷺別 精神病院近く完成」の見出しで、「自宅収容患者の家族には大きな福音」と恵愛病院の開業を伝える『室蘭民報 日高胆振版』の記事が紹介されている（恵愛病院創立50周年記念誌編集委員会2007：24）。当時、室蘭、登別、伊達地区に精神科病院がなかったため、各地区より往診の依頼が多くあったこと、統合失調症ばかりでなくさまざまな疾患の患者がいたことを千葉初代院長は回顧している（恵愛病院創立50周年記念誌編集委員会2007：16）。

1956年には総合病院伊達赤十字病院精神科(30床)が伊達市に開設、1957年には三村病院(36床)が室蘭市に開設（北海道精神病院協会1998：258, 265）、そして1961年には市立室蘭総合病院の精神科分院として祝津分院（100床）が誕生する。初代分院長・斉藤義寛医師は同分院建設に際して、室蘭市建築指導課審査係長とともに当時の全国のモデル病院であった茨城県立友部病院、神奈川県立芹香院と国立武蔵療養所を見学した。その結果、病棟の70%以上を開放とした近代的な病棟が生まれたという。斉藤医師は「当時としては全道にも比較するものがなく、全国的にも超一流の精神病院が建てられた」と後に振り返っている（市立室蘭総合病院1972：76）。

1962年には恵愛病院が200床に増床、1964年に恵愛病院初代院長だった千葉寿良医師は三愛病院（111床）（田中氏インタビューによれば、千葉院長が「1」にこだわった結果の病床数だという）を開設した。同じ1965年には祝津分院が180床に増床（市立室蘭総合病院1992：41）、1967年には恵愛病院2代目院長の加藤和雄医師が有珠郡壮瞥町に三恵病院（300床）を開設、1968年元・祝津分院長の斉藤医師が斉藤医院（10床）を開設した（北海道精神病院協会1998：253, 96）。それだけこの地に精神科病院への入院のニーズがあったということだろう。また、恵愛病院の院長経験者が同一圏域内に精神科病院を設立してそれぞれ増床を重ねたのは、西胆振圏域の特色である。

三愛病院の開設に際して、開設者の千葉院長は当初室蘭での精神科病院開設を構想していたという。千葉院長はその理由を「当時昭和四十年頃、室蘭は人口に比較して、精神科の専門病院は二つだけであり、ベッドの数からいってももう一つはあっても良いという様に考えていたし、自分の扱っている患者さんの半分以上は室蘭市の人達であったからである」と述べている（医療法人三愛病院1975：29）。しかし、静療院出身の千葉院長は、「自分で病院を作るなら、かなりの広さの敷地、たとえば患者さんの為の運動場、作業用地等も確保できるものを希望」



していたため、室蘭市には適切な土地が見つからなかった。また、有名な温泉地には立派な病院があり、その中で精神科の病院も目立っていたことを覚えており、登別温泉の近くで病院をやってほしいとの希望もあったことから決意を固めたのだという（医療法人三愛病院1975：30）。このような開設時からの意向に基づき、三愛病院は環境面の整備（「ガーデンホスピタル」を目指していた）に力を入れるとともに、開設者・千葉院長の患者への思い入れも強く一夫人によれば「患者さんを診ているときが一番楽しい、2、3日患者さんの顔を見ないと何か物足りない」と言っていたという（医療法人三愛病院1975：33）一、患者も千葉院長を慕うといった関係性のある病院であった。

なお、胆振地区では病院間の交流が盛んで、1957年、苫小牧の佐藤病院、伊達赤十字病院、恵愛病院の三病院で「日胆地区精神病院連盟」が組織され、同年より「日胆地区精神病院連盟患者対抗ソフトボール大会」を開催、以降、参加病院を増やししながら毎年開催された（遠藤1984：166）。三恵病院、伊達赤十字病院、室蘭市立病院祝津分院、恵愛病院、三愛病院、苫小牧の佐藤病院と同病院分院の柏原病院（1970年統合して道央佐藤病院）、千歳市の支笏湖病院、鶴川の鶴川厚生病院が出場していたという（田中氏インタビューより）。

また、1965年には精神衛生法の改正により保健所における精神衛生相談業務が強化されたのを契機に、室蘭保健所が中心となり室蘭地方精神衛生協会の設立を準備し、同年9月に協会が発足している。初代会長は柘植重夫・市立室蘭総合病院院長であった。設立以来、精神衛生に関する普及啓発、家族会や断酒会への協力を行った（北海道精神保健協会1993：56-57）。詳細は今回不明であったので、今後調査する必要がある。

一方で、1960年代後半に入ると、全国的な動向と同様に、精神科病院批判が内部から生じてきたと思われる。祝津分院長を務めた後、道立精神衛生センターに移った伊東嘉弘医師は、1972年刊行の市立室蘭総合病院『100年のあゆみ』のなかで、次のように述べている。

「祝津分院は以上の如く良い環境に建てられ、施設としても、その75%が開放病棟（全国平均は20%）であることなど、入院生活を送る患者さんにとっては、比較的快適な病院といえるかも知れない。しかし、これも見方を変えれば問題なのである。残りの25%が閉鎖病棟で、この病棟の平均在棟期間は大変短いのであるが、開放病棟の在棟期間は大変長くなってきている。もっとも、祝津分院全体の平均在院日数は323日（昭和46）で全国平均の443日よりはるかに少ないのであるが、それでも、開放病棟内に安定し、従順で元気な、いわゆる良い患者さんが、大変多くなって来ている。一見、結構なことようであるが、これはいわゆる“院内適応”ができて、“社会適応”が困難な人達なのである」（市立室蘭総合病院1972：77-78）。

上の文章に続き伊東医師は、上記状況の要因として、「病院財政上の壁であり、このために、医師・看護婦は別としても、PSWや、O.T.その他の専門職の増員が困難になっている」こと、「精神障害者を、職場や社会から排除しようとする社会的風潮」「community careの欠如」の3点をあげている（市立室蘭総合病院1972：78）。

こうして、単に病院に入れることが「福音」と見なされた時代は終わり、病棟に閉塞感がう

まれるなかで、各病院でソーシャルワークが行われていったのである。

なお、室蘭・登別地区の精神科医療および精神保健ソーシャルワークの歴史の概略について、表1に示した。

表1 室蘭・登別地区の精神科医療および精神保健ソーシャルワークの歴史の概略

年	月	出来事
1873	3	元室蘭に官立病院。6月、新室蘭に移転、室蘭病院と改称(1882年公立→1901年町立→1918年区立→1922年市立)
1902		町立室蘭病院附属室蘭精神病院(6坪, 2床)設立
1930	8	北海道大学精神病学教室教授・内村祐之がカルルス温泉視察
1955	12	恵愛病院開設(50床)(遠藤廣雄事務長, 千葉壽良院長←静療院←北大医専)
1956	6	総合病院伊達赤十字病院精神科(30床)開設
1957		日胆地区精神病院連盟設立(佐藤病院, 伊達赤十字病院, 恵愛病院)
	8	三村病院(36床)開設
1961	7	市立室蘭総合病院祝津分院(100床)開院(初代分院長・斉藤義寛)
1964	6	患者陶芸手芸品展示即売会を室蘭保健所で開催
	11	三愛病院(111床)開設
1966	4	恵愛病院にケースワーカーとして佐々木寿男氏入職(8月31日付で退職)
		三愛病院に田中秀治氏入職(ケースワーカー)
1967	4	祝津分院にPSWとして佐々木敏明氏入職
	12	三恵病院(300床)開設
	12	三愛病院カルルス診療所開設(～1969年5月)
1968	1	斉藤医院(10床, 院長・斉藤義寛)開設
1970	1	斉藤医院・斉藤義寛院長の尽力で「三愛院内断酒会」開催
1971	4	断酒センター開設(～1973年)
1973	6	室蘭地区精神障害者家族会連絡協議会結成
1977	8	有珠山大噴火により罹災した三恵病院を救援
1978	4	恵愛病院・遠藤秀雄院長, 室蘭地方精神保健協会会長に就任
	12	三恵病院 移転開院
1985	4	恵愛病院にPSWとして佐藤克彦氏入職
1996	12	恵愛病院, 新病院に引っ越し(「改築検討委員会」の存在)
1997	5	祝津分院廃院。翌月, 市立室蘭総合病院精神科神経科(180床)開設
1998	4	恵愛病院, 老人デイケア, 精神障害者共同住居「のぞみ寮」開始
	5	三愛病院, 精神障害者社会復帰施設(生活訓練施設, 通所授産施設)開設
	11	ミネルバ病院(160床)開設



### (3) 室蘭・登別地区の精神保健ソーシャルワークの歴史

この地区で最も早いソーシャルワーカーの採用は1966年のことであり、恵愛病院に佐々木寿男氏、三愛病院に田中秀治氏（以下、田中氏）が入職している。ただし、恵愛病院の佐々木氏については短期間で退職していることもあるためか、先述の遠藤氏による『私の歩いた道』（遠藤1984）の職員名簿で確認した以外に情報は得られなかった（田中氏については後述）。

次いで1967年、北星学園大学文学部社会福祉学科（当時）を卒業した佐々木敏明氏（現在、北海道医療大学教授）が祝津分院に「PSW」として入職。その当時について、佐々木氏は「熱心な看護師(ママ)のなかにはOTやPSWのやるような仕事を自らの生きがいとして取りくんでいたのです。従って、私のような大学を卒業したばかりの若いPSWに対しては風あたりが強く、はじめのうちはなぜだかわからないので大変戸惑いました」と回顧している（佐々木1980：9）。そのようななか、院長から最初の仕事として「家族会」と「断酒会」の世話役を与えられ飛びついたところ、他のスタッフが手をひいてしまい、大変な思いをする。しかし、次に与えられた仕事である、開院以来5年間に退院した「アルコール中毒症患者170名の予後調査」が断酒会の意義や家族指導の大切さを実感する経験となったという。さらに、その結果を（室蘭地方）精神衛生協会の研究大会で報告し、保健所職員や福祉事務所ワーカーなどと顔見知りになることができた。その後、看護者からの要望もあって「患者と家族の橋渡し」役を務め、患者の要望にこたえて外勤作業療法を企画するなど、病院内外におけるPSWの仕事を形成していったことがわかる（佐々木1980：10-11）。

なお、上記で佐々木氏が世話役を任された「断酒会」とは、1965年11月に北海道初の断酒会として誕生した室蘭断酒会と思われる。2011年に開催された「第6回北海道アルコール・薬物依存予防、早期発見、解決市民フォーラム」における森勲・元北海道断酒連合会理事長の講演資料「北海道断酒連合会の歴史」には、「昭和40年11月室蘭・祝津で会員7人により室蘭断酒会が誕生し北海道の地で戦後の断酒会第1号として断酒の灯火をかけた」とある（森2011）。

三愛病院の田中氏は、地元の高校を卒業後採用され、すぐに院長の指示により仏教大学の通信教育で社会福祉を学んだそうである（田中氏インタビューより）。三愛病院では、組織的には医局の下部組織となる医療相談室に配置され、ケースワーカーの呼称で、千葉院長をはじめとした医師の指導の下、ソーシャルワーク業務をスタートさせている。

開設まもない三愛病院は、まずは30人くらいの患者から始まったという。当初、心理検査もワーカーの仕事で、内田クレベリン検査の資格を取りに東京まで行ったと田中氏は話されていた。措置入院の書類作成も主要な仕事だったという。三愛病院には先に設立された恵愛病院よりも症状の重い患者が来る傾向があったようで、薬物依存(覚せい剤)の患者も多かったそうだ。治療としては電気ショック療法やインシュリンショック療法なども行われていた。一方で、「ガーデンホスピタル」の理念から、開放的な雰囲気の中患者とともに園芸もよく行っていたという。また、田中氏は野球が得意で、先述した「日胆地区精神病院連盟患者対抗ソフトボール大会」では田中氏が監督に就任後、三愛病院が3年連続優勝したこともあったそうだ（田中氏

インタビューより)。

また、1970年頃、田中氏は当時千葉院長と親しくされていた加藤和雄医師が開設した三恵病院に1年間出向して勤務された経験もあり、精神科医の繋がりから精神保健ソーシャルワークが精神科病院に必要性不可欠という認識、期待が高かったことがうかがえる。

その三恵病院は、1977年8月7日の有珠山の噴火により被災する。廃校後の旧仲洞爺小学校に避難するも、噴火翌日の豪雨で井戸水が使用不可となり、給水炊事ができない状態になった(北海道精神病院協会1998:152)。支援を仰がれて、三愛病院からは田中氏、そして恵愛病院も、水やインスタントラーメンなどの物資援助に入ったそうである(田中氏インタビューより)。医療面については、小樽の石橋病院から医師・看護師の派遣を受け、また、北海道庁衛生部、室蘭保健所、日本精神病院協会北海道支部(支部長・岡本康夫)の協力により、8月10日には「三恵病院災害対策会議」を開催、避難患者265名中外泊可能者78名を仮退院にし、他は伊達赤十字病院に61名、祝津分院に21名、三村病院に60名、三愛病院に25名、恵愛病院に20名を預けた。その後、仮退院者から十数名病状の悪化した者が出、石橋病院に入院させた。この経過について、岡本支部長が『日本精神病院協会月報』で報告し、協会所属の病院からの寄付や1億1,900万円の国庫補助があり、避難場所の地に新たな三恵病院を1978年12月に開院することができた(北海道精神病院協会1998:89-91, 153)。

さて、1970年1月には、斉藤医院の斉藤院長の指導の下、断酒会(「三愛院内断酒会」と呼称)が開催され、翌年4月には和歌山に次いで全国で2番目となる断酒センター(上登別町にあったホテルの社員寮建物を利用)が開設した。田中氏はこの開設に関わり、集団精神療法、グループワーク等の活動にも関与した。同センターの目的は、「アルコール中毒患者の回復者を一ヶ所に集めて、日課に従って規則正しい集団生活を送らせ、この中で食事、清掃などを自主的にやらせ、医師が断酒の訓話をしたり、各人と懇談するという内容で、本人の自発的な意志によって、酒と縁を切らせる」ことにあった。所長には、幌別カトリック教会の泉隆氏が就任したという(医療法人三愛病院1975:65)。

各機関のソーシャルワーカーの組織化はこの地域では1960年代から行われていたようで、MSWとPSWが合同で事例検討会などを行っていたことが特徴である。1970年代には、「胆振地区ソーシャルワーカー協会」(呼称は定かでなかった)として、日胆地区のMSW、PSW、また企業立病院の衛生管理者、行政からも保健所普及課、保護課職員など毎回20数名が集まり、当時祝津分院にいた清水耕策氏、登別厚生年金病院の芝田氏がスーパーバイザーとなり事例発表を年2回、宿泊形式で洞爺、登別カルルスの温泉で行い、研鑽を積んでいた。

精神科のソーシャルワーカーの動向としては、祝津分院の佐々木氏が1970年7月から国立武蔵療養所に勤務、1974年に清水耕策氏が入職している。清水氏は1968年に伊達赤十字病院にMSWとして入職、1970年に伊達が町から市になったことを契機に市の福祉事務所に勤務していた(清水2018)。恵愛病院では、1969年3月25日に遠藤三千之氏が入職、1975年3月末まで勤務したほか、1973年3月26日から1975年7月21日まで亀掛川典子氏、1976年4月1日から

1978年4月4日まで佐々木尚美氏が勤務していたことが、『私の歩いた道』（遠藤1984）の職員名簿からわかった。三愛病院では、1973年に2人目のソーシャルワーカーとして窪谷芳弘氏が採用された。窪谷氏は千葉院長と『カルルス温泉と日野久橘』（千葉・窪谷1985）という書籍を発行しており、この点からも千葉院長がソーシャルワーカーを重宝していたことが伺える。『三愛病院開院20周年記念誌』の記載によれば田中氏が「医事課（2）課長」（医療法人社団千寿会三愛病院1986：118）、『三愛病院開院30周年記念誌』の記載によれば、窪谷氏が同課長、田中氏は関連施設である老人保健施設グリーンコート三愛（1994年5月開設）の事務長となっており（医療法人社団千寿会三愛病院1996：129, 95）、ソーシャルワーカーが院内でのソーシャルワーク部門、専門職としての地位を確立していったものと思われる。

恵愛病院では、1985年に佐藤克彦氏（以下、佐藤氏）が事務局所属で入職。以下、佐藤氏へのインタビュー結果からまとめる。佐藤氏が入職する1年前にもソーシャルワーカーが採用されたが10カ月で退職。1984年以前のソーシャルワーカーについては、先述の日胆地区のソーシャルワーカーが集まっての事例発表では、恵愛病院より遠藤三千之氏が参加している。佐藤氏は事務を兼務する形で相談室でのソーシャルワーク業務に従事。当時は診療報酬になかった訪問看護であるが、仕事が終わってから患者宅へ訪問する活動も行っていた。その後、1986年に当時は看護師にのみに限られていた精神科訪問看護が診療報酬化されたが、佐藤氏は看護師とともに訪問した。また、事務も兼務していたことからレセプト請求に携わるなど各部署との様々な業務に携わり、有機的な院内多職種連携を実践した。このことは1996年の新病院建設の改築検討委員会で事務課長としての中心的な役割を担い、院内での立場を確立した。新築移転後の患者の表情の変化や活動性の向上などが見られたと佐藤氏は述べており、病院運営に関与することの重要性も見出すことができる。その後、ソーシャルワーカーは増員され、佐藤氏はその後、老人デイケア、精神障害者共同住居「のぞみ寮」、精神科デイケアの開設など携わるなど重責を果たしている。

佐藤氏入職当時は、近隣の病院のソーシャルワーカーには、精神科では室蘭市立病院祝津分院に清水耕策氏、伊達赤十字病院に尾崎氏、室蘭の斉藤医院には小銭氏がおり、そのほかMSWに室蘭大河原病院の青木氏、登別厚生病院の松倉氏等と月例の勉強会を開催している。

## 5. 小括：室蘭・登別地区でのソーシャルワークのありよう

以上、室蘭・登別地区の精神保健福祉の発展について、資料・史料、およびインタビューから確認することができた。

室蘭・登別地区の精神保健福祉の特徴として、3点挙げることができる。1点目は病院間の交流が古くから盛んであったことである。精神科病院開設にあたって医師間のつながりも深く、このことが、古くから「日胆地区精神病院連盟」が組織され、患者対抗ソフトボール大会が開催されるなど病院間の交流につながっている。

2点目に、精神科病院の開設後、間もなくソーシャルワーカーが採用され、それぞれの職場で重要なポストを担っていることである。開設者や医師からソーシャルワーク業務への期待があり、また多くの業務に携わる中で院内・法人内での専門職としての立場を確立させ、病院の機能拡大に大きく寄与している。

3点目に、1970年代よりMSWとの勉強会、事例検討会が早くから開催され、ソーシャルワーク実践の向上を図っている点である。精神保健福祉士の資格化前は勿論のこと、病院開設後間もなくからソーシャルワーカーが採用されていたが、当時は精神科病院そのものが少なく、ソーシャルワークに関する勉強会・事例検討会などもMSWとの合同で開催されている。精神保健ソーシャルワークに限定しなかったことにより、地域としての精神保健ソーシャルワーカーの具体的活動に発展せず、他領域のソーシャルワーク実践や院内業務の実践に触れ、2点目に挙げた院内・法人内での専門職の確立につながったのではないかと推察できる。

今回調査では、同じく西胆振地区である三恵病院や伊達赤十字病院、三村病院のソーシャルワーカーについて詳細がわからず、さらなる調査、整理が必要と思われた。

また東胆振地区になる苫小牧市は、これより調査を進めていくが、独自のソーシャルワークの展開がみられている。今回調査によって明らかになった日胆地区精神病院連盟や日胆地区ソーシャルワーカーの事例検討会との繋がり、その影響などについては明らかにする必要がある。

＊注 本稿での『精神病院』『精神科病院』、『精神医療』『精神科医療』の表記について

歴史的表現として『精神病院』『精神医療』という表現があるが、偏見、差別的イメージがあることから、『精神病院』については2006年の精神病院の用語整理法により、関連法律が全て『精神科病院』に統一されたことを踏まえ、本稿では引用および固有名詞にあたるもの以外は『精神科病院』、『精神科医療』に表記を統一した。

## 謝辞

本報告にあたりましては、元三愛病院の田中秀治様、恵愛病院の佐藤克彦様には、長時間に及ぶインタビューや各種資料等のご提供など、多くのご協力いただきましたことに感謝申し上げます。

また、本研究・調査にあたり、北海道内の先駆的なPSWのお1人であり、北海道医療大学の佐々木敏明教授には、都度ご助言をいただいておりますことを、この場をお借りし感謝申し上げます。

## 付記

本報告は、平成29年度科学研究費助成事業「北海道における精神保健ソーシャルワークの歴

史記録と教育コンテンツの構築」(課題番号：17K04230) の成果の一部である。

## 文献

- 板澤庄五郎 (1930) 『温泉療養の栞』 吐鳳堂書店
- 医療法人三愛病院 (1975) 『三愛病院開院10周年記念誌』 千葉寿良
- 医療法人社団千寿会三愛病院 (1986) 『三愛病院開院20周年記念誌』 千葉寿良
- 医療法人社団千寿会三愛病院 (1996) 『三愛病院開院30周年記念誌』 千葉寿良
- 遠藤廣雄 (1984) 『私の歩いた道』
- 大西次郎 (2015) 『精神保健福祉学の構築～』 精神科ソーシャルワークに立脚する学際科学として～』 中央法規出版
- 岡田靖雄 (1981) 『私説松沢病院史：1879～1980』 岩崎学術出版社
- 岡田靖雄 (2002) 『日本精神科医療史』 医学書院
- 呉秀三 (1912→1977) 『我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設』 (複製版) 精神医学神経学古典刊行会
- 恵愛病院創立50周年記念誌編集委員会 (2007) 『恵愛病院50周年記念誌』 医療法人社団友愛会 理事長遠藤秀雄
- 恵愛病院創立60周年記念誌編集委員会 (2017年) 「恵愛病院 開院60周年記念誌」
- 佐々木敏明 (1980) 「私の歩んできた道」『P & M SOCIAL WORK』 4, 十勝精神医学ソーシャル・ワーク研究会
- 市立室蘭総合病院 (1972) 『百年のあゆみ』 市立室蘭総合病院
- 市立室蘭総合病院 (1992) 『百二十年記念誌』 市立室蘭総合病院
- 市立室蘭総合病院 (1961年) 『八十八年のあゆみ』 市立室蘭総合病院
- 清水耕策 (2018) 「現場から学ぶ 地域福祉の現場におけるソーシャル・グループワーク」 日本集団精神療法学会第35回大会発表資料 (2018年5月13日)
- 千葉寿良 (2007) 『私のカルテ 精神科医の八十二年』 北海道医療新聞社
- 千葉寿良・窪谷芳弘 (1985) 『カルルス温泉と日野久橘』 メディカル・プランニング
- 特定医療法人社団千寿会三愛病院 (2006) 『三愛病院 開院40周年記念誌』
- 登別町史編纂委員会 (1967) 『登別町史』 登別市長岩倉誠一
- 広田伊蘇夫 (2004) 『立法百年史 精神保健・医療・福祉関係法規の立法史』 批評社
- 北海道精神病院協会 (1998) 『北海道精神病院協会史 1958-1998』 北海道精神病院協会
- 北海道精神保健協会 (1993) 『創立40周年記念誌』 北海道精神保健協会
- 森勲 (2011) 「北海道断酒連合会の歴史」 第6回北海道アルコール・薬物依存予防、早期発見、解決 市民フォーラム講演資料 <http://www.naikan-ninchi.net/al-forum/syouroku/6/> (2018.12.23)

